

「書く」「読み返す」の反復が、アイデアを生み続ける 毎日を面白くするノートのチカラ

破壊工学の専門家であり、イグノーベル賞受賞者にして、コーヒーの権威——そんな廣瀬幸雄さんの活躍を支えるのは、多彩なアイデアであり、そのアイデアの源は、なんと年間百冊もの大学ノートにあるという。独自のノート術と、これまでの歩みを、ちよっぴりのぞかせてもらった。

工学博士

廣瀬幸雄

●ひろせ ゆきお 1940年石川県生まれ。金沢大学名誉教授。「中谷宇吉郎 雪の科学館」館長。2003年、「ハトに嫌われた銅像の化学的考察」でイグノーベル賞受賞。コーヒーに関する造詣も深く、日本コーヒー文化学会副会長でもある。著作多数。

親父が心に火をつけた

——今回は大学ノートに着目した特集なんですが、『望星』では、こうした身近なものを通して、いまの世の中を見てみよう、考えてみようという特集が多いんです。

僕、そういうの好きです。やっぱり身近なことか、関係あると思え

ることからじゃないと、自分の頭で考えるってなかなかできないと思いますから。

僕は日頃、子供の理科離れを気にしています。ものごとを観察すること、その中からいろんな疑問を見つけて考え続けること——これは、自分が経験的に身につけてきたことでもあるんですが、その面白さをぜひ、子供たちにも知ってもらいたいんで

す。

中谷宇吉郎って雪の科学者がいるでしょう？ 彼は石川県出身で、雪を観察することで考えついた仮説を証明するため人工雪の製作に挑戦し、世界で初めて成功した人なんですよ。『雪は天からの手紙』とか、いい本もいっぱいあってね。僕は理学部物理学科出身で、物理でも観察ってすごく大事なので、そこは彼の姿勢に

通じるものがありますね。

僕自身、子供の頃から観察好きだったのかというと、必ずしもそうではなかった。きっかけは親父でした。金沢の兼六園には日本武尊やまとたけるの銅像があつて、その台石が、ヘビ、ナメクジ、カエルの三すくみに見立てられているのを知っていますか？ それぞれ、ヘビはカエルより、カエルはナメクジより、ナメクジはヘビより強いってことなんです。ナメクジがヘビより強いっていうのは不思議でしょう。親父はそれがなぜかを実験で見せてくれたんです。

それは、ナメクジが通つてできたヌメヌメした道の上を、ヘビを追い立てて歩かせるというものでした。するとヘビは、二日後には木に皮だけぶら下がっていて、中身は別の所で死んでいた。なぜそんなことが起きたのかというと、ナメクジはアル

カリ性で、ヘビは酸性だから、二つが反応してヘビがやけどしたんです。それが酸とアルカリの関係で起きたとわかったのはもつと後のことでしたが、この実験のおかげで、ナメクジがヘビより強いことが、知識じゃなく体験として理解できた。それから、何か不思議なことがあると興味湧いてきて、いつのまにか科学が好きになってしまったんですよ。

石川県には、ヘビを蒸し焼きにして精力剤を作っているところがあつて、そこでは蒸し焼き前にいちいちヘビの頭を叩いて殺し、その後トグロを巻いて焼いていたんですが、もっと簡単にすむ方法があると思ひ、三ポルトの乾電池を直流で流すとヘビはすぐにトグロを巻くことを発見しました。このアイデアも、親父が実際にやって見せてくれたことがヒ

ントになっています。
——お父さんは何者ですか？ 学校の先生とか？

いやあ、ただの百姓です。ただね、アーサー・ウィリアムってイギリスの哲学者が、普通の教師は説明するだけで、もうちよつとい教師は理解させようとす、でもいちばん優秀なのは相手の心に火をつけるんだと言ってるんですけど、親父は僕の心に理科好きの火をつけたんだと思う。百姓の親父のどにそんな知恵があつたのかはわからないけど、親父も、疑問に思ったことはやって確かめてみたいという好奇心があつたんでしょうね。

大学で四十五年も教員をしてきたんですが、その間、偉大な教師とは何かということはいつも頭にあって、相手の心に火をつけられる教師こそがそうだ、というのが僕の見解です。